36　朝陽富士　和田英作

大正六年（一九一七）
油彩・キャンバス
八七・五×一一四・〇

一面

三保の松原から望む富士山である。描かれた季節は初冬であろうか、日の出の光を受けて冠雪した頂上付近の右側がほんのりと染まり始め、空が徐々に明るくなるわずかな時間帯をとらえている。複雑な色合いの上空は点描で、画家のいる三保の松原はまだ暗く特徴的な松林はシルエットで描かれている。海面付近には靄が漂い、富士はうっすらと幕が掛かったような淡い色調で描かれるが、山頂付近の描写だけは精緻になされている。これは献上画であったためかもしれないが、風景画に限らず筆あとを残すスピード感のあるタッチを特徴とする和田には数少ない、謹直さを感じさせる画風である。和田は本作の制作以前も以後も、生涯に渡って富士を描き続けているが、それは自らの追い求めた日本人の描く洋画の完成に挑む行為でもあったのだろう。晩年には富士がよく見える清水市に移住しアトリエを構えたという。

本作は、大正五年（一九一六）の裕仁親王の立太子礼を祝って、全国の文官一同から献上された七面の油彩風景画のうちの一つである。残りの六面は、中川八郎、山本森之助、中澤弘光、石川寅治、安田稔、金観鎬が分担し、それぞれ内外各地の名勝を写生した作品を完成させ、同七年にすべてが完成して献上された（このうち現存が確認されているのは、他に中川八郎と山本森之助のみ）。これらの作品は、東宮仮御所として使用されていた高輪御殿の一室に揃って飾られていたことが当時の記録写真から明らかになっている。

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

名所絵から風景画へ――情景との対話

三の丸尚蔵館展覧会図録No.76

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　黒川廣子
発行　宮内庁
平成二十九年三月二十五日発行

© 2017, The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan